

「反逆」のマスターナラティブ： 西洋を創ったサバンナの英雄（1）

Moses the Pleistocene Liberator: The Savanna Principle in *Exodus* 1

小 沢 茂

OZAWA Shigeru

キーワード：文学としての聖書，進化論批評，文学的ダーウィニズム

「子曰はく、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」。『論語』為政編に見える有名な一節である。十五で学問に志して以降、七十で「心のままに行動しても礼儀や規則などに外れることがない」（宇野 38-39）ようになるまでの人格の完成の過程が語られている。ここで注目したいのは、この一節は孔子の個人的な成長の回想であるにもかかわらず、万人が模範とすべき「人生の脚本」のような存在として受け止められるようになったということだ。たとえば四十を不惑というが、われわれは四十歳をひとつの目安として、ものごといたずらにうろたえず、どっしりと落ち着いた人間にならなければならない、そうした理想に向かって邁進すべきである、という考え方がなされる。個人の特定の出来事の記録が、共同体の構成員が共有する規範となっているのである。

「不惑」の例に見られるような、特定の出来事が多くの人々にとっての考え方、生き方の準拠となるという現象は、近年、西洋の心理学者の間で注目されるようになってきた。事実、虚構を問わず、出来事の記録を英語で「ストーリー」と呼ぶが、人間のアイデンティティもこうした「ストーリー」で形成されている、という考え方がある。ナラティブ・アイデンティティという概念がそれだ。この概念の提唱者のひとり、アメリカの心理学者ダン・P・マックアダムズは、「生きるために有意義なアイデンティティを見いだそうとして、われわれはエリクソンが述べたように、過去を『選択的に再構築』し、未来を想像して、ライフ・ストーリー、もしくは今日、心理学者たちがナラティブ・アイデンティティと呼んでいるものを構築しはじめる」（*Art and Science* 1）という。さらに興味深いのは、そうしたナラティブ・アイデンティティは、いってみれば「単著」－ひとりが作ったもの－ではなく、「共著」－複数の主体が作ったもの－であり、具体的には、特定の時代、文化に特有の価値観にしたがって個人が語るものだ、という指摘である。「わたしたちはひとりひとりに特有のライフ・ストーリーを作り出すために過去の経験に深く依拠しているが、文化が提供してくれるイメージ、メタファ、イデオロギー、物語から幅広く借用している。たしかにわたしたちは唯一無二のストーリーの作家ではあるが、

周囲の社会的、イデオロギー的、文化的世界から多くの『編集者』としての助力、ないし抵抗をうける」(*Art and Science* 1)。マックアダムズはこうした時代、文化に特有の価値観を、心理学者フィリップ・ハマックの唱えた「マスターナラティブ」という用語で説明する。「マスターナラティブは所属集団が自らの歴史や運命をどう理解しているかを凝縮したものだ。そうする際、マスターナラティブは集団の構成員が自らの立場を世界の中でどう理解すべきかを暗示する。それゆえ集団に所属する個人はマスターナラティブに見られるテーマを個人のライフストーリーに適用することになる」(*Art and Science* 271)。「不惑」の例でいえば、東アジアの漢字文化圏では伝統的に『論語』為政編に語られた孔子の個人的なストーリーが模範的な人生として「マスターナラティブ」を形成し、それに沿って個々の人間がナラティブ・アイデンティティを構築する、ということになる。

東アジアで圧倒的な存在感を持っているのが孔子のストーリーであるとすれば、西洋でそれに匹敵するほどの力を持っているもののひとつは旧約聖書の『出エジプト記』に見える、モーゼの出エジプトのストーリーであろう。これは旧約聖書全体を通してきわめて重要なエピソードとなっているとされる。

出エジプト記によれば、エジプトで圧政に苦しんでいた民族集団がなんとかそこから逃れ、荒野を旅し、山にたどり着く。その山で神がモーゼを通じて共同体が守るべき掟と神殿〔幕屋〕の建設法を伝え、彼らはそれに従って聖所を建てる。(中略) エジプトでの寄留の生活とそこからの脱出を扱った前半部分は、旧約聖書の他の部分—詩篇、預言書、そしてストーリー全体に〔通奏低音として〕鳴り響いている。(Meyers 1)

そして、単に旧約聖書全編を通じて大きな役割を果たすというだけでなく、ナラティブ・アイデンティティの提唱者マックアダムズ自身の理論、西洋史学者ジョン・コフィーの分析、そして旧約聖書学者デヴィッド・カーらによれば、モーゼのストーリーは単に聖典に含まれる一エピソードではなく、西洋人のアイデンティティの基盤となるような恐るべき力を持っているのだ。

マックアダムズはアメリカ人の多くに共通するマスターナラティブを「恩返し的神話」(redemptive self) と名付けているが、この中核にあるのがモーゼのイメージである。マックアダムズは「恩返し的神話」の特徴として、自分が神に選ばれた優れた存在であるという選民性、それに比べて周囲は恵まれていない哀れむべき存在であるという認識、それゆえに恵まれた自分が恵まれていない人々を救わなければならない(社会に恩返しをしなければならない)という使命感、この過程で生じたあらゆる障害を乗り越えることでよりよい自分になれるという成長の観念を挙げている(*Redemptive Self* xvii) のだが、この萌芽は既に建国以前から見られた。アメリカに植民を行ったピルグリム・ファーザーズは自らをモーゼやその後継者ヨシユアになぞらえ、大西洋を紅海に見立て、カナンの地を新大陸に重ねた。この図式の中では神に

選ばれた民イスラエルと自分たちが結びつけられる。独立戦争を経て自由を獲得したアメリカ人はさらにこのモーゼ率いる選民イスラエル民族との同一視を強めていく。そして、選ばれた民である自分たちが、未だ暴君の圧政に苦しむ恵まれていない他国に対しては時には自ら模範を示すことで、時には積極的に介入を行う事で救おうとする (*Redemptive Self* 84-86) —これが国家レベルで見た場合のアメリカの「恩返し」の神話であり、個人レベルにおいても、才能、環境などの点で他よりも恵まれていると早い時期に認識し、長じてのち、それを社会、とりわけ次の世代に貢献する活動を通して「恩返し」をしようとするのだ、という (*Redemptive Self* 49-50)。国家レベルのストーリーと個人レベルのストーリーは密接に関係しており、「ピューリタンの神話とそれに関連するさまざまな概念がアメリカの文化に非常に深く根づいているという事実があるために、各人が特別で唯一無二の、本質的に才能ある個人であり、人生において何か重要な善きことをする召命を受けているという心理的概念を醸成する一助となっている」 (*Redemptive Self* 99) というのがマックアダムズの説である。この説に従えば、アメリカ人のナラティブ・アイデンティティはその草創期から、モーゼと切っても切れない関係であったことになる。

マックアダムズの「恩返し」の神話はアメリカ特有であるかもしれないが、その起源となった、モーゼや彼が率いたイスラエル民族に自らを重ね合わせるという行為は、コフィーによれば決してピルグリム・ファーザーズに限ったものではなく、西洋においては歴史を通じて見られたという。コフィーは、マックアダムズも指摘しているピルグリム・ファーザーズや独立戦争のほか、4世紀のコンスタンティヌス帝、16世紀のメディチ家、宗教革命、清教徒革命、名誉革命、キング牧師の公民権運動、オバマ大統領の選挙活動など、場所も時代も違う様々な舞台で、人々は自分たちをイスラエル民族に、そして自らの指導者をモーゼになぞらえてきたと指摘する (215-17)。コフィーはナラティブ・アイデンティティという表現は用いていないが、たとえば清教徒たちにとって出エジプトは「たんなるストーリーのひとつではなく、神の靈感を受けた政治的パラダイムであり、それは神が国家の歴史の中で、抑圧から神の民をいかにして解放したかを示している。このなじみのある聖書のストーリーが個々の出来事に強い宗教的重要性を与え、聖書とのつながりを形成するのだ。自由、奴隷といった抽象的な概念に物語という肉付けを与え、政治的な隷属という今日の関心事を劇化、神聖化するのである」 (42) と述べている。「〔説教を〕聞く者は自分たちや自分たちの国がエジプトに虐げられ、最初の過越の食事をし、解放者に不満を言い、荒野をさまよひ、シナイ山で陣営を張り、ピスガ山で約束の地を臨むところを想像する。ストーリーにあまりにもなじんでいるので、細かい部分を繰り返す必要はない—エジプト、ファラオ、紅海、荒野、カナンの地に単に言及するだけで、この聖書という叙事詩の中でもっとも知られているストーリーから鮮やかな場面が呼び起こされる」 (42) のだ。結果的に「清教徒の議会派は心の中でヘブライ人たちの足跡を辿り、エジプトの圧政を逃れて約束の地に向かって進んでいったのだ」 (42) ということになる。こうした現象が、先ほど述べたように歴史を通じてさまざまな地域で繰り返されてきたというのがコ

フィーの主張なのだ。これは言い換えれば、コフィーの挙げているもっとも早い例である4世紀以降、キリスト教文化圏では出エジプトのストーリーがマスターナラティブとして機能し続けてきたということにもなる。

旧約聖書学者のカーによれば、モーゼのストーリーがマスターナラティブとなったのは4世紀ではなく、もっとずっと過去に遡る。カーは、出エジプトのエピソードは

きわめて早い時期の古代イスラエル、おそらくエジプトからの逃亡者からなる『脱出集団』がエジプトを逃れて〔イスラエルの〕丘陵地帯の集落に住む人々に合流し、モーゼに率いられてファラオの支配から逃れた話をした時に遡る。(中略)しかし、エジプトからの何らかの形で脱出が歴史的に事実であったとしても、丘陵地帯の集落に住む人々に新しい重要な魅力を持っていない限り、そのエピソードは今日まで生き残ることはなかったであろう。そして、そのような魅力があったと考えるのには十分な理由がある。なぜならこうした集落時代のイスラエル人たちは彼らにとっての『ファラオ』すなわち彼らを包囲するように存在し、抵抗しなければならぬ都市国家群の支配者が存在したからである。(中略)エジプトからのヤハウエによる奴隷の解放のストーリーはそのような都市国家に対して生存権をかけて戦う村人たちにとっては強力な援護射撃になったことであろう(Introduction 45)

と述べている。コフィー同様、カーもナラティブ・アイデンティティという言葉は用いていないが、ここで丘陵地帯の集落に住む人々がカーのいう「脱出集団」と自らを重ね合わせたことを考えれば、既にモーゼの出エジプトのストーリーはこの時点でマスターナラティブとして機能していると言える。ちなみにカーも、前述のコフィー同様、オバマ大統領(Introduction 45)やキング牧師(Introduction 91)の演説の中でモーゼが重要なモチーフとして用いられたことに触れている)。ここでいう「丘陵地帯の集落」に、のちにイスラエル人と呼ばれることになる一群の人々が定住を始めたのは紀元前1300年から1200年のことであるとされている(Introduction xx)から、出エジプトがマスター・ナラティブとなったのはコンスタンティヌス帝より千年近く前のことということになる。

カーはさらに、モーゼと当時の指導者が重ね合わされた例として、南北分裂後の北イスラエル王国を挙げる。

出エジプト記の中に、初期の北王国の脱出のストーリーの断片を垣間見ることすらできるかもしれない。(中略)出エジプト記のストーリーは、モーゼによるエジプトからのイスラエル民族解放が、ヤロブアムによるレハブアムからのイスラエル民族解放と重なるような形で書かれているからである。

どちらも特権的な家で育ち、抑圧されている民衆に共感し、圧政者から逃れ、その暴君

が死んだときに舞い戻ってきて、新しい主君に抑圧を緩めるよう交渉して、拒否されると、最終的には民衆を抑圧のもとから導き出すのである。ヤロブアムによる北王国の解放がたまたま、モーゼによるイスラエル民族解放と同じ構図になったのかもしれない。しかし、こうしたストーリーの類似は、初期の北王国でヤロブアムに仕えていた記者たちが、ヤロブアムの指揮の下、ソロモンとその息子レハブアムの圧政から解放されたという最近の「脱出」劇に合わせて、北部に伝わっていた古くからの脱出の伝承を〔再〕構成したということの方が起こりうるように思える。（中略）出エジプトについての古くからの口承伝承を文字に残した北王国の記者たちは、彼らの新しい王ヤロブアムのように見える形で「モーゼ」を称揚することができるように、ストーリーを再話したのである。（*Introduction* 95）

都市国家群に対抗するマスターナラティブとして口承で語り継がれてきたモーゼのストーリーが、またしても新たなマスターナラティブとして、今度は文書の形になったというわけである。

カーの説に従えば、旧約聖書が最終的に現在の形に編纂された紀元前 600 年から 400 年ごろのいわゆるバビロン捕囚の時期においても、故郷を滅ぼされ新バビロニア帝国に強制移住させられたユダヤ民族のエリート層にとってのマスターナラティブも出エジプトであった。カーは以下のように述べる。

モーゼのストーリーの起源は古いものではあるが、聖書の中でモーゼのストーリーが現在の形になったのは、それがずっと後代の、捕囚のユダ族にとって魅力的であったからである。これは、出エジプト記から申命記までの各書がふたつのレベルで機能したことを意味している。ひとつのレベルにおいては、モーゼとイスラエル民族がエジプトを逃れ、荒野で四十年を過ごし、シナイ山で十戒と他の律法を受けるというプロットがある。このストーリーは遠い過去に舞台を置いており、少なくとも部分的にはモーゼのようなバビロン捕囚以前の伝統に立脚していよう。モーゼはおそらくは実在の人物である。しかしひとつのレベルにおいては、モーゼのストーリーはずっと後代のユダ族の経験、すなわち、捕囚を受けている、もしくは捕囚以後のユダ族の経験に結びついている。これらの捕囚期のユダ族はモーゼに関する古い伝統を保持し、現在私たちが目にしていくようなテキストに作り替えた。確かに、聖書学者たちは正確にどのようにこれらのテキストが形成されたのかについての合意には達していないが、現存するモーゼのストーリーはエジプトであれバビロンであれ、集団的なトラウマを中核として織り上げられたものである。（*Holy Resilience* 110-11）

カーは、マスターナラティブの動的な側面、おそらくマックアダムズも意識していなかったような動的な側面に注目している。カーによれば、捕囚期のユダ民族は、既に存在していたモーゼのエジプト脱出のストーリーを再編集し、自分たちにとってより適した形に作り替え、それ

が新たな規範となったのだ。マスターナラティブは各個人が受け身で用いるだけのものではなく、集団の構成員が能動的に「書き込み」、編集して作り上げるものでもあるということになる。カーはこのような編集作業の結果として、モーゼが捕囚の民と重なるような経験をする設定が生まれたという。「捕囚の民（とりわけ二世、三世など）のように、モーゼは異国の地の危険の中で育ち、彼の信奉する神は時として殺人的な悪魔のように見える。しかしモーゼとテキスト内でモーゼとイスラエル民族が並列的に書かれているような構造によって、捕囚のユダ族の読者は古代の『イスラエル民族』と自らを重ねてみることができるようになった。彼らはモーゼがエジプトという『捕囚』から導き出した民族と自らを同一視することができたのである」（*Holy Resilience* 115）。バビロン捕囚の人々が苦しい生活を生き抜くマスターナラティブとして再構成した出エジプトのストーリーが旧約聖書として残ったというわけである。

古くは紀元前1300年ごろから新しくは21世紀のオバマ大統領まで、モーゼの出エジプトのストーリーは西洋の人々にとってマスターナラティブであり続けてきたわけだが、その理由は何か。大勢の人々が共感し、自分を重ね合わせて勇気を奮い立たせるようなこのストーリーの力はどこから来るのだろうか。近年欧米で盛んになってきた進化論批評という文学理論を用いて、出エジプトのストーリーをひとつの文学作品として分析し、その魅力の一端を明らかにしたい。本論では、ストーリーの冒頭にあたる出エジプト記1章をとりあげる。

1

マスターナラティブとしての出エジプト記の魅力进行分析の上で進化論批評が有益なのは、この理論の焦点のひとつが鑑賞者の価値観を変えるストーリーの力、そして、それを発揮するためにストーリーテラーがいかに鑑賞者の関心を引くかに当てられているからである。進化論批評はチャールズ・ダーウィンの唱えた自然選択説、すなわち、長い時間の中で、コストを上回るような利益をもたらす形質のみが次代に引き継がれてきた、という考え方にに基づき、膨大な時間とエネルギーを費やす「ストーリーテリング」という行為にも、そうしたコストを上回る利益があるはずだ、と考える。もしストーリーテリングが時間と労力の無駄であったならば、そのような無駄な行為を行う個体はとうの昔に駆逐され、現在まで生き残ることができなかったからである（ボイド『ストーリーの起源』82-83）。ストーリーが人類に対して与えた大いなる利益とは、認知機能の発達と価値観の共有による集団内の協力行為の向上である（Boyd “Evolution” 11）。実験で確かめられているように、人間はフィクションを鑑賞する際でも実際にそこで描かれている出来事を経験しているのと同じ脳の反応を起こすため、ストーリーを鑑賞することは一種の人生シミュレーションとなる（Gottschall 61-62）。ちょうどパイロットが高価な実機を操縦する前にフライトシミュレーターで経験を積むように、ストーリーの鑑賞を通して人生経験を積み、人間の心理について楽しみながら勉強するのだ（Gottschall 58）—というのが第一の機能である。そして第二の機能としては、こちらがナラティブ・アイデンティティ

とより深く関連するが、ストーリーを楽しむ際、称賛されている行為、否定されている行為を通して、そこに含まれている価値観を理解することができ、ひとつのストーリーを集団の構成員の多くが共有することで、価値観そのものを共有することができる、というものだ（ボイド『ストーリーの起源』181-82）。特定の状況においていかに生きるべきか、人生とはどうあるべきか、といった価値観を集団の構成員が共有することで、より統一した行動を取ることができ、集団としての競争力が高まるというのである。進化論批評はさらに、すぐれたストーリーがこれらのふたつの機能を果たすため、どのようにして鑑賞者の関心を獲得しているかも明らかにしようとする。

学術的な文学批評は作品の持つ意味—伝統的な批評家はそれをテーマと呼び、最近の批評家はイデオロギーと呼ぶ—に焦点を当てる傾向にある。しかし芸術作品は何かを「意味する」（1）以前に受容者の心を引きつけ、それを動かす必要がある。作品に含まれるあらゆるディテールは読者の瞬間的な関心の強弱に影響するけれども、ストーリーから抽出される意味は必ずしもそうではない。わたしたちの精神は一度に限られた物事にしか焦点を当てることができない。受容者の関心を引くものは作品のほかにも数多くあるから、その中で彼らを逃がさないためには書き手は工夫をこらし鑑賞者の心理に直観的に精通している必要がある。しかし批評は関心を引き出し、それをつなぎ止める能力を軽視する傾向にあった。

ストーリーテリングに生物文化的にアプローチし、書き手が受容者の関心を引くためにどのような工夫をしているかに焦点を当てることで、テキストのデザインとディテール、（大きなものであれ小さなものであれ）書き手の戦略的決断、そして世界中の、あるいは地域的な受容者の反応により肉薄することができる。（ボイド『ストーリーの起源』214）

マスターナラティブの機能とされる、生き方の指標、モデルを与えるというのはすなわち一種の価値観の共有である。鑑賞者の関心をいかにとらえ、その価値観にどのように影響していくかを分析する進化論批評は、出エジプトのストーリーがマスターナラティブとして力を発揮してきた理由を探るのには最適といえよう。

出エジプトのストーリーが鑑賞者にとって魅力的な理由は、進化心理学の概念である「サバンナ原則」から説明できるように思われる。ストーリーがシミュレーションとして機能するという進化論批評の視点から考えれば、鑑賞者のストーリーへの接し方は基本的に現実の出来事への接し方と同じわけであるから、どのようなストーリーが鑑賞者を感動させ関心を引くのかという問題を考えるには、そもそも人間の感情が対象に接してどう動くのかを理解しなければならない。そこで手がかりになるのが「サバンナ原則」であり、出エジプトの魅力はサバンナ原則が作り出したといってもよい。サバンナという語は唐突に聞こえるかもしれないが、進化心理学においては重要な意味合いを持ち、モーゼのストーリーの根底にある抑圧からの解放と

いうモチーフの魅力をよく説明してくれる。進化心理学者のサトシ・カナザワとノーマン・リーは2018年に出版された *The Oxford Handbook of Evolution, Biology, and Society* の、彼らが執筆した章の中で、以下のようにこの原則が示す内容を総括している。

進化心理学の基本的な見解のひとつは、ほかのあらゆる種のほかのあらゆる器官と同様、人間の脳は必ずしも現在の諸条件ではなく、祖先が暮らしていた環境の諸条件に適応するようにできており、したがって、あたかも祖先の環境にいるかのように現在の環境を知覚し、それに反応する傾向がある (Tooby & Cosmides, 1990)。「サバンナ原則」(Kanazawa, 2004b)、進化的レガシー仮説 (Burnham & Johnson, 2005)、あるいはミスマッチ仮説 (Hagen & Hammerstein, 2006; Li, Lim, Tsai & O, 2015) など、さまざまな名前で呼ばれるこの見解は、人間の脳は祖先の環境、おおざっぱに言って更新世のアフリカのサバンナに存在しなかったものや状況を理解したりそれらに対処したりすることが難しいことを意味する。(Kanazawa and Li 171-72)

人間の脳が「祖先が暮らしていた環境」に適応しており、「更新世のアフリカのサバンナに存在しなかった存在や状況」をうまく理解できない、ということは、出エジプトのストーリーを考える上で非常に重要である。ここでいう「祖先の環境」とは、「おおよそ150人程度 (Dunbar, 1992, 1993) の小規模集団で狩猟採集者として」(Kanazawa and Li 178) 暮らしていた環境のことであり、この時期にはまだ農業は開始されていなかった。出エジプトをひとこと言えばファラオの圧政からの解放ということになるだろうが、サバンナ原則に基づいてリーダーシップについて分析している進化心理学者のマーク・ヴァン・ヴェットによれば、ファラオのような専制君主が登場したのは農耕定住開始以降、リーダーに莫大な富と権力が集中するようになってからのことである (125)。サバンナでの暮らしは比較的平等なもので、誰かひとりに権力が集中しそうになると構成員は同盟して反逆するため、圧政は生じにくかったというのがヴァン・ヴェットの見解である (107)。サバンナ原則にしたがえば、人類は圧政に適応していない。何十万年も続いた狩猟採集時代、祖先たちはお互いが平等な立場で集団生活を営んでおり、権力者には反抗するような本能を身につけていた。特権的な地位、階層は農耕定住時代に集団サイズが拡大した際に生じた (Vugt and Ahuja 126) とされるが、そうした理性的な措置は「更新世のアフリカのサバンナに存在しなかったもの」なので、「人間の脳は (中略) 理解したりそれらに対処したりすることが難しい」。その結果、地位が上の人間には反感を持ち、隙あらば反逆を企てるということになる。平等を重んじる心、反逆する心は狩猟採集時代以来の人類の本能であり、我々は本能的に権力者、圧政者のいない祖先の環境を恋しく思うのである。モーゼはエジプトの一端ではわかっているが本能的には「理解できず、(中略) 対処できない」一圧政を逃れ、祖先が暮らしていたのと同様の、誰もが平等な環境を実現しようとする。圧政者ファラオと、解放者モーゼのうち、狩猟採集時代に適応したままの我々の脳は本能的に、後者

に魅力を感じるのである。モーゼは言ってみれば、サバンナの英雄なのだ。

旧約聖書を進化心理学の視点で分析したカール・ヴァン・シャイクとカイ・ミシェルによれば、旧約聖書は農業革命とその後の大きな社会変動に対応するための文化的な処方箋であり、モーゼ律法はその核心であった。シャイクとミシェルはまず、農業革命がもたらした危機と、その対策としての文化の必要性を強調する。農業革命は「空前のサクセスストーリーの舞台を整えた」けれども大きな「負の側面」も持っていた。つまり、「暴力は日常生活の大きな部分を占め、平均身長は低くなり、飢餓に苦しむ率は上がり、平均寿命も縮んだ」。さらに「動物の家畜化によって、多くの病気が家畜から人間に伝染した」。「ペスト、天然痘、はしか、インフルエンザ、コレラなどが現れ、急速に進化した。虫菌が爆発的に増えた。同時に、不正と抑圧が新たな社会では日常茶飯となり、女性がとりわけ苦しめられた」のである。だからといって「旧来の生活に戻ることはできない」ため、何らかの対策を考え出さなければならない。「生物学的な進化によってこれらの脅威に対する適応が生み出されるのを待つ」ては間に合わないため、人々は文化によって対処しようとした(7-8)。旧約聖書はこうした「歴史的状況の反映」であると同時に「『人類史上最悪の過ち』〔である定住の開始〕に対処するもっとも野心的な戦略を提示してくれる」(9)というのがシャイクとミシエルの説である。シャイクとミシエルによれば定住の開始こそが人類の「原罪」であり(57)、エデンの園は定住以前のわれわれの祖先の生活環境、すなわちサバンナということになる。シャイクとミシエルの説では、この「原罪」すなわち定住の開始にともなう様々な問題の対処法が旧約聖書に記されているのだが、その中でもっとも重要なのが「文化的一大傑作」(10)としてのモーゼ律法であった。シャイクとミシエルはレビ記などに記されている十戒をはじめとした微に入り細をうがったモーゼ律法が「流浪の民の主目的〔である約束の地への入植〕を完全に見失わせてしまう」というゲーテの嘆きに反論し、「『主目的』はモーゼの冒険を語るのではなく、律法の提示である」(129)と述べている。農業革命、定住の開始によってもたらされた諸問題がモーゼ律法によってある程度解消されたというわけである。

シャイクとミシエルの主張に対する筆者の立場は両義的である。確かに、十戒をはじめとするモーゼ律法は暴力沙汰やトラブルを未然に防ぐ効果があっただろう。およそ文明社会で生きていく上で、何らかの法体系は不可欠である。しかし、どんなに素晴らしい法であっても、それを人々に守らせるためには何らかの権威付けがなければならない。たとえば有名なハンムラビ法典などをはじめ、古代の法は王自らが制定し、そしてその王は神に委任されたという形式を取っている(Niehaus 56-57)が、それはそうでもしなければ人々を法に従わせることができなかったからだ。モーゼ律法も同様である。旧約聖書学者のマイケル・クーガンとシンシア・チャプマンは、十戒をはじめとするモーゼ律法について以下のように述べている。

出エジプト記が展開していくにつれて、モーゼには〔十戒よりも〕もっとずっと多くの指示が神から与えられる。あまりにも多いので、〔出エジプトの〕物語そのものが、間に挟

み込まれている内容の額縁のようなものになっている。しかし実際、これが高等批評の研究者たちの結論なのだ。モーゼ五書を最終的に完成させた祭司記者たちは、ひとつには、起源も成立時期も異なる先行する法的、儀式的伝統を、モーゼと彼に対するシナイ山での啓示に関連付けることでそれらに特別な権威を持たせるために、ストーリーの中に挿入したのである。(122)

要するにモーゼ律法は必ずしも史実のモーゼに関連するものではないのだが、出エジプトに関するモーゼの口承伝承、文書による伝承があまりにも権威があったために、彼に仮託されたというわけだ。シャイクとミシエルの主張は、言ってみれば、律法を「主」とし、出エジプトのストーリーを「従」と見るものであるが、筆者はこれらふたつは車の両輪のようなもので、どちらが欠けても旧約聖書の核心をなすモーゼ五書の力は失われてしまったであろうと思う。さらに、モーゼ律法は後世に重要な影響を与えた価値観、とりわけ「汝の隣人を愛せよ」という利他主義の教えを有していることは否定できないけれども、これまで見てきた、出エジプトをマスターナラティブとした政治的運動や支配者、指導者たちは、丘陵地帯に住む古代イスラエル人、王朝分裂後の北王国のヤロブアム一世、バビロン捕囚後の祭司記者たちを除き、いずれもキリスト教徒であり、そしてキリスト教では「律法によっては、神のみまえに義とされる者はひとりもない」(ガラ3:11) ことが重要な教義のひとつとしてあることを考えなければならぬ。そして前述のクーガンとチャプマンの記述を敷衍すれば、丘陵地帯に住んでいたころの王国成立前の古代イスラエル人や王国分裂時のヤロブアム一世のころは、まだモーゼと各種律法が結びつけられていなかった可能性が高いのである。シャイクとミシエルはモーゼ律法こそが旧約聖書の重要な内容、定住時代を生き抜く処方箋であると高く評価しているけれども、出エジプトの受容史を考えれば、むしろ律法よりも、現在の旧約聖書の中でその「額縁」の役割を果たしているモーゼのストーリーの方が大きな影響を与えていると考えられる。モーゼ律法の革新性は確かにシャイクとミシエルの指摘する通りであるかもしれないが、彼らはいささか出エジプトのストーリーの持つ力を過小評価しているのではないだろうか。進化論批評の見方では、ストーリーの方がシャイク、ミシエルのいう「文化のビッグ・バン」(8) よりも早い時期に生じている。進化論批評の理論家ブライアン・ボイドは以下のように言う。

系統発生的に言えば、ストーリーはわたしたちの祖先が四十万年あまりにわたって定期的に使用してきたキャンプファイアのまわりで発生したのであろう。ナミビアとボツワナの狩猟採集民であるブッシュマンの会話を研究したポリー・ウィーズナーによれば、昼間の会話は生活の経済的、社会的側面についてのものに焦点が当てられているが、キャンプファイアを囲んでの会話の八割以上は、しばしば音楽や踊りを伴うストーリーであるという。ストーリーは、しばしば現在の、あるいは過去三世代にわたる実在の人物についてのもので、笑いと驚きにあふれ、ジェスチャー、模倣、音響効果、歌をとめない、時として

純然たるフィクション、民話、神話、そして精霊界との遭遇の報告を含む。ロビン・ダンバーは、炎によるあかりが活動的な時間を四時間増やし、その間「社会的な交流—多くは、唯一の社会的な交流がそこで生じた」のだ、という。ウィーズナーは他の狩猟採集民族の民俗学的記録の中に類似したパターンを見だし、一日の労働が終わると人々が子どもたちに妖精物語を読んで聞かせ、小説を読み、映画を見、ラジオドラマに耳を傾け、テレビドラマを楽しみ、ビデオゲームに興ずる現代西洋文化と比較している。（“Evolution” 10）

このようなストーリーが集団に特定の価値観や規範を共有させる役割を果たした、というのがボイドを含む進化論批評の研究者たちの見解である。ストーリーには言語が必要だが、ボイドは今からおよそ50万年前の人類の祖先ホモ・ハイデルベルゲンシスにおいて既に言語らしきものを話す能力が備わっていたという説をとっている（“Evolution” 4）。このボイドの説にしたがえば、50万年前に言語が生まれ、40万年前にキャンプファイアが生まれ、そしてストーリーが生まれて、それ以前から存在していた集団の価値観や規範がストーリーを介して共有されるようになった、ということになる。ただ、言語の起源については諸説あり、この、ボイドがとっている50万年前というのはそのうち、もっとも古く遡る説のひとつである。もっとも新しい時代に起源を求める説ではずっと最近の、およそ10万年前ということになるようだ（Tamariz 1）が、いずれにしても農耕定住の開始時期である1万2千年前よりも古く、複数の進化論批評の研究者たちはストーリーは人類の適応であり、本能であると見ている（Carroll 431）。集団の価値観の共有というストーリーの機能は、シャイクとミシェルがいうところの、定住開始以降の文化的大躍進でも遺憾なく発揮されたはずである。シャイクとミシェルが言うように、定住開始以後激増した人口、拡大する集団サイズの中で、集団の構成員に求められる複雑な規範や価値観をストーリーによって共有することは莫大な利益をもたらしたに相違ない。モーゼ律法という文化の大躍進の背後にはモーゼの出エジプトという本能に根ざしたストーリーの基盤があり、魅力的なストーリーなくして複雑な律法を共有することは不可能であった。だからこそ、クーガンとチャプマンが指摘するように、本来律法体系とは無関係であった出エジプトのストーリーが利用されたのであって、これこそが、革新的であった文化的発明、モーゼ律法の威力がそれほど重視されなくなった状況においても出エジプトのストーリーがマスターナラティブとして機能し続けた理由であろう。

2

出エジプトの物語は「サバンナ原則」に基づいた幸福を描き出すことで始まる。進化心理学者ダグラス・ケンリックは、人間の欲求をピラミッド型の階層で示したが、その最上位は子育てとなっている（293）。人間を含むあらゆる生物は自らの遺伝子を次世代に引き継ぐために生きているわけだから、ケンリックの欲求階層にしたがえば、子孫が繁栄することにまさる喜び

はないということになる。出エジプトの冒頭では、まさにこの、人類の究極の目的であり幸福の源泉であるところの子孫繁栄が描かれる。

さて、ヤコブと共に、おのおのその家族を伴って、エジプトへ行ったイスラエルの子らの名は次のとおりである。すなわちルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アセルであった。ヤコブの腰から出たものは、合わせて七十人。ヨセフはすでにエジプトにいた。そして、ヨセフは死に、兄弟たちも、その時代の人々もみな死んだ。けれどもイスラエルの子孫は多くの子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなって、国に満ちるようになった。(1:1-7)

この部分はキャロル・マイヤーズによれば、創世記1章28節の描写と共鳴しており、「エジプトのイスラエル民族がもうひとつの創造、すなわち民族の創生であることを強調している」(33)という。しかし、唯一神による天地創造という文化的背景を受け入れない読者にとっても、「イスラエルの子孫は多くの子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなって、国に満ちるようになった」という1章7節は喜びの感情を抱かせるに十分なものである。出エジプトに先行する創世記のヨセフ説話でヨセフに感情移入してきた（ストーリーはシミュレーションであるという進化論批評の立場からいえば、ヨセフとして生きてきた）読者は、彼の子孫が繁栄することと自分の子孫が繁栄することが重なり、大きな喜びを得るわけだ。旧約聖書が現在の形になったとされるバビロン捕囚期においては、民族の存続の危機にあった捕囚の民はとりわけこの子孫繁栄の描写に自分たち自身の子孫の繁栄を重ねて希望を抱いたであろうが、上記の通り子孫繁栄は最高の本能的欲求であるから、捕囚の民であろうとなかろうと、広く訴求力を持つものとなっている。

皮肉なことに、読者を最高の幸福に預からせるサバンナ原則は、同時に、この同じ箇所でも、読者に不吉な予感を抱かせる。それは端的に言えば資源へのアクセス権をめぐる集団内闘争が生じる危険性に関するものだ。進化心理学には、およそあらゆる戦争、競争は「資源」を求めてのものだという見方がある(Thayer 99)。今、イスラエルの民は故郷ではなくエジプトにいる。イスラエル人がエジプトの「国に満ちる」ようになれば、限りあるエジプトの資源をめぐるエジプト人との闘争が生じる可能性がある。長い狩猟採集時代、資源をめぐる集団内、集団間闘争を続けてきた中で進化した人類の感情が、ここで警報を鳴らすのだ—増えすぎて危ない、エジプト人との戦争になるぞ。こうして、出エジプト記の冒頭は、子孫繁栄という人類にとってのこの上ない幸福と、戦争という危険を両方とも含んだ、きわめて緊張に満ちた形で始まるのである。

読者の不吉な予感は8節以下で的中し、「新しい王」がイスラエル民族への弾圧を開始するのだが、その動機は、人類がまだ人類でなかった時代、チンパンジーであった時代から持っていた特質、流動的な集団内の地位と、そこから生じるリーダーの不安である。

ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起った。彼はその民に言った、「見よ、イスラエルびとなるこの民は、われわれにとって、あまりにも多く、また強すぎる。さあ、われわれは、抜き取りなく彼らを取り扱おう。彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、われわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」。

(1:8-10)

狩猟採集時代、人類は比較的平等であったというヴァン・ヴェットの説についてはすでに触れたが、それを実現させた原因である、多数が同盟しての反抗は、実は人類のもっとも近い類人猿であるチンパンジーにおいてすでに見られるという。ウィル・ストアは、霊長類学者フランス・ド・ヴァールの指摘を援用しつつ、これがドラマの源泉であると言う。

チンパンジーのアルファ個体はおおよそ4年から5年の間支配する。地位がきわめて重要であり（中略）すべての構成員の地位が常に流動的であるために、地位はほぼ常に強迫観念のような関心事となる。この地位の変動が人間のドラマの中核なのだ。それは忠誠と裏切り、野望と絶望、愛と失望、権謀術数、挑発、暗殺、戦争の物語を生み出すのである。

チンパンジーの政治学は人間の政治学と同様、陰謀と同盟に満ちている。きわめて多くの他の動物とは異なり、チンパンジーは嘯みつき、戦って頂点にのほり詰めるのではなく、他と同盟を組む必要がある。高い地位に就いた場合、彼らは慎重に政策を行う必要がある。下のものにやりたい放題に振る舞うと、反抗され、地位を追われてしまうからだ。「チンパンジーが持っている判官びいきの傾向は本質的に不安定な階層構造を生み出す。その中ではトップの権力は他のいかなる猿類よりも危うい」と霊長類学者のフランス・ド・ヴァールは書いている。群れのリーダーが玉座を追われる場合、それはたいてい地位の低い雄ザルが彼らに同盟して刃向かったためである。(145)

判官びいきの傾向とは、弱者に共感し、肩入れするという本能的傾向で、チンパンジーにはこの傾向があるために同盟が可能になったという。強者に従う本能だけであれば、弱者同士の同盟は起こりにくいわけだが、判官びいきの傾向があるために弱いもの同士で徒党を組んで抵抗することができるようになったのである。この判官びいきについては後に触れるが、ここで注目したいのは「トップの権力は他のいかなる猿類よりも危うい」というド・ヴァールの指摘である。チンパンジーにおいて、そして長らく続いた狩猟採集時代での人類において、トップの権力は危うかった、というのは先に見たヴァン・ヴェットの説でもあった（101）。しかし、ヴァン・ヴェットによれば、農耕定住時代に富と軍事力の集積が進み、トップはそれほど危険ではなくなった。同盟して反抗したとしても強大な軍事力で制圧されてしまうため、反抗そのものが起こりにくくなったためである（129）。ただ、こうした新しい変化に感情の適応が追いついていない、というのがサバンナ原則の教えるところだ。ファラオの脳は依然として、狩猟採集

時代、あるいはもっと以前のチンパンジー時代に適応によって獲得された、絶えず反抗を恐れるリーダーの不安にさいなまれている。彼は「彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、われわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」というのだが、このうち、「敵に味方して、われわれと戦い」が、同盟を恐れるリーダーの本能的恐怖を示している。旧約聖書学者マイヤー・スターンバーグは、このファラオの不安について「彼もエジプト全土も、ひとつの家系の自然増を、あたかもそれが大帝国の人口と比肩しうるかのよう恐れ、それを口に出すとすれば、正気の沙汰ではない」(123)と指摘しているが、この不自然なまでのファラオの不安は人類がまだチンパンジーだった時代から根強く残る本能的なものなのだ。

ファラオの「ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」も、人類特有の本能的恐怖を示している。そもそも増えすぎて困るというのであれば、出て行ってもらえば丸く収まりそうなものだから、ファラオの不安は理屈が通っていないように見える。しかし、狩猟採集時代に適応した感情がその後の急速な変化に追いついていないというサバンナ原則はここにも当てはまる。ヴァン・ヴェットは、狩猟採集時代の比較的平等な人間関係を維持した要因として弱者同士の同盟を挙げたあと、次のように述べている。

同盟の形成以外に、平等で民主的な関係の進化を促した第二の鍵は家来が自分を見捨てて去ってしまうという脅威だ。この脅威が現実的なものになると、支配者はしばしば進んで降参せざるを得なくなる。チンパンジー（少なくとも雄のチンパンジー）は同盟を形成するが、群れを離れることはできず、このためにアルファ個体に依存することになる。しかしわれわれ人類の祖先は人口密度の低いサバンナに暮らす定住地を持たない狩猟採集民族であった。彼らには他の虐げられた個体とともに逃亡し、抑圧者ひとりをおとに残していくという手段があったのだ。(108)

「他の虐げられた個体とともに逃亡し、抑圧者ひとりをおとに残していく」ことに対するファラオの恐怖の表れが「ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」というせりふである。スターンバーグが指摘するように、エジプトにはもっとずっと多くの人々がいたわけであるから、イスラエル民族がまるごと逃げ去ってもそれほど痛手ではない。しかしこの偏執狂的な恐怖は狩猟採集時代に適応したリーダーの本能的恐怖であるためにぬぐいがたく、ファラオを悩ませるのである。そして事実、ファラオの懸念は現実のものとなる—イスラエル民族のリーダー、モーゼはよりによって最強の「敵」ヤハウエと「同盟」し、「虐げられた個体」である民族全員を連れて「逃亡」し、「抑圧者」であるファラオひとりをおとに残していくのだ。出エジプトとはサバンナ原則に基づくファラオの不安で始まり、その不安が現実のものとなるプロセスでもあるのである。

3

ファラオは自らの不安を強制労働で解消しようとするのだが、これは農耕定住時代以降の人類にとっての普遍的な問題のひとつを表現しており、それゆえにほぼすべての読者にとって身近に感じられ、共感を引き起こす要因となっている。狩猟採集時代であれば、ファラオが自らの不安に対処する方法はひとつしかなかっただろう。それはイスラエルの民により平等に接し、寛大なリーダーになって反逆や逃亡を防ぐことである。さもなければ、容易に打倒されてしまったはずだ。しかし、農耕定住以降時代が進み、集団の規模が次第に大きくなって、エジプトのような大帝國が誕生した現在、ファラオにはもうひとつの解決法が手に入るようになった。それは、かつて狩猟採集時代では「禁じ手」であったはずの圧政そのものである。イスラエル民族を迫害してその勢力を弱め、反逆や逃亡をより直接的に防ぐことができるようになったのだ。

そこでエジプトびとは彼らの上に監督をおき、重い労役をもって彼らを苦しめた。彼らはパロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。しかしイスラエルの人々が苦しめられるにしたがって、いよいよふえひろがるので、彼らはイスラエルの人々のゆえに恐れをなした。エジプトびとはイスラエルの人々をきびしく使い、つらい務をもってその生活を苦しめた。すなわち、しっくいこね、れんが作り、および田畑のあらゆる務に当らせたが、そのすべての労役はきびしかった。(1:11-14)

ファラオはまず、イスラエルの民の労働力を搾取する。「重い労役」はフリードマンによれば必ずしも奴隷労働を意味せず強制労働の意であるという（170）が、正当な報酬が支払われていないことは間違いない。ファラオはこの労働力搾取によって「倉庫の町」を建設し、「しっくいこね、れんが作り」などの建築作業、「田畑のあらゆる務」すなわち農作業に従事させてエジプト帝国の一すなわち自身の一富を増やすのである。このような圧政をヴァン・ヴェットは、農耕開始と関連付けている。

もしこの〔狩猟採集の〕時期がわたしたちの指導者や部下たちの心理を形成したのだとすれば、現代の独裁者、圧政者、暴君の誕生をどのように説明すればよいだろうか。（中略）チンパンジーやゴリラと共有する、他者を支配し搾取したいという原始の傾向が、13,000年前の農業革命によって解き放たれたのである。食料はもはや共有される必要はなかった。それは（権力者にとっては）豊富にあり、備蓄することができるようになった。この単純な事実がきわめて異なる社会構造と社会学を生んだのである。定住社会、専門的な職業の誕生（人々はもはや狩猟や採集に出かけなくてもよくなった）、そして後に見るように腐敗である。（124）

「他者を支配し搾取したいという原始の傾向」は、決して人類において消滅してしまったわけではない。科学者たちは、そのような支配する本能はチンパンジー、ゴリラ、現生人類共通のものであり、それが同盟を組んで反抗するという拮抗的な本能によって「無効化」されると考えている。ゴリラはもっとも無効化の程度が少なく一反抗はごくまれにしか生じない—チンパンジーがそれに次ぎ、人類においてもっとも甚だしい (Boehm 96)。したがってサバンナ原則はわれわれがふたつの相反する本能を持っていることを教える。「(支配的な方法で) 集団を統率したいという傾向と、(慈悲深く平等主義的な方法で) 支配されたいという傾向の間の明白なる矛盾」(Vugt and Ahuja 40) である。狩猟採集時代においては圧政者の本能は無効化されていたが、農耕開始によって「きわめて異なる社会構造と社会学」が生まれた結果、圧政者に有利な状況が生まれたのである。同盟しての反抗に対しては、以下のような手段で、今度は圧政者側が「無効化」することができるようになった。

リーダーは武装集団を動かして自らの領土を防衛し他の領土を略奪する（そして、時には被征服者を奴隷化する）権威を持つようになった。このような兵士たちは国土を守り拡張する際に重要な役割を果たすことになる。指導者たちはこの兵士たちをよこしまな用途に用い、兵士を動員して私的な紛争を解決したり民衆の反乱を抑え込んだりすることもできるようになったのである。(Vugt and Ahuja 128-29)

もし、出エジプトの舞台が狩猟採集時代であれば、イスラエル民族は「重い労役」に唯々諾々と従事することはなかったであろう。サバンナの本能が彼らに「圧政者ファラオを討て」と命じ、それにしたがって反抗することができるからである。しかし定住が進んで大帝國が支配する時代、いくら本能では圧政者に嫌悪感を抱き反逆したいと願ったとしても、強大なエジプトの軍事力がそれを許さない。こうした構図は農耕による富の集中がサバンナの相対立する本能の一方に過剰なまでに有利に働いた結果であるから、古代エジプトに限らず、世界中のあらゆるところで、あらゆる時代に見られるもので、ファラオのような極端なものでなくとも、ヴァン・ヴェットのいう「腐敗」すなわち為政者が自分ないし自分の親族、友人が不当に有利になるような施策をとることはほぼ普遍的、日常的な現象であるといつてよい。これは、鑑賞者—旧約聖書が現在の形にまとまったとされるバビロン捕囚期のユダヤ人にとってであれ、カーの指摘するような、それよりずっと以前の、丘陵地帯に定住を始めたばかりの古代イスラエル民族にとってであれ、あるいはマックアダムズやコフィーが言及するようなピルグリム・ファーザーズやオバマ大統領の支持者たちにとってであれ—が、出エジプトのストーリーに共感し、自らをモーゼや圧政に苦しむイスラエル民族に同一視するために重要な役割を果たしていると考えられる。彼らもまた、支配され搾取されることを本能的に嫌悪し圧政者に反発しながら、富と権力の集中によって容易にそうすることができないという同じ状況をかこっているからである。

労働力の搾取だけでは十分な効果が挙げられないと見たファラオは、今度は別の搾取、すなわち性的搾取に乗り出す。

またエジプトの王は、ヘブルの女のために取上げをする助産婦でひとりは名をシフラといい、他のひとりは名をプアという者にさとして、言った、「ヘブルの女のために助産をするとき、産み台の上を見て、もし男の子ならばそれを殺し、女の子ならば生かしておきなさい」。(1:15-16)

ファラオの「選択的嬰兒殺し」の目的は、旧約聖書学者のビクター・ハミルトンによれば、男の子だけ殺すことで、ゆくゆくはイスラエル人の女性をすべて自分とエジプト人が独占できるから、というものである（13）。殺されず、成長した女の子はイスラエル人の同年代の配偶者が得られないために、エジプト人の男性と結婚することになる。エジプトは父権制社会であるからエジプト人の男性と結婚したイスラエル人の女の子はエジプトの家庭に入ることになる。こうして一世代後にはイスラエルには新たな子孫は生まれなくなるであろう。こんなまわりくどいことをせずとも、男女ともすべて殺してしまえばよさそうなものだが、ここには男女の性差に起因する希少価値の相違が関連している。手がかりとなるのは、マイヤーズの指摘である。マイヤーズはこの箇所を『創世記』におけるアブラハムの懸念と重ねている（36）。アブラハムはエジプトに寄留した際、自分の妻サラが非常に美しいので、そのために自分が殺されてしまうのではないかと心配し、表向きはサラを「妹」であるとして生活していたところ、ファラオがサラを見初めて側室に迎えたと書かれている（創世記 12:10-15）。ファラオに限らず権力者は古来より大勢の妻を持つことが珍しくなかったが、進化心理学の視点では、それは自らの遺伝子を最大限に残すための行動であるとされる。そもそも、男性と女性はパートナーを求める場合に本能的に異なる戦略をとる。デーヴィッド・バスとデーヴィッド・シュミットは、「人類の進化史において、子孫の数という視点から見た男性の繁殖成功度は多くのパートナーと性的関係を持つことで増大したであろう。対照的に女性は（中略）性交渉の相手を増やしたとしても子孫の数（それゆえ繁殖成功度）を高めることはできない」。それゆえ男性は「多くの女性と性交渉を望む」ようになった、という（226）。女性は複数の男性と関係しても一度に妊娠出産できるのはひとりだけだが、男性は複数の女性と関係すればそれだけ女性を妊娠させる確率が上がり、自分の遺伝子を残す可能性が高くなる。だから男性は可能な限り多くの女性と関係を持ちたがる本能を持っている、というわけだ。この男女の戦略の違いが圧政者の性的搾取の根源となるのである。

暴君は評判が下がることなど気にしない。見返りが非常に大きいからである。具体的に言えば、ダーウィンの理論では、子孫の数を最大にする行動が広がっていくことを予測している。そして実際、悪人は善人よりも子孫の数が多いいのだ。104の伝統的な社会（アメリ

カのアステカ族からクン族まで)のさまざまな文化をサンプルとして、権力の不平等(中略)でランク付けし、指導者のハーレムに何人の女性が囲われているかを基準として並べ替えてみるとよい。専制の度合いと残した子孫の数の間に強い相関が見られる。3つのS(サラリー、ステータス、セックス)の原則がここにも当てはまる。専制君主は食料や他の資源を独占でき、権力を拡大し(これは地位と表裏をなしている)その結果性交渉を行う機会も増大するのだ。女性はといえば、彼女たちは高い地位の男性を求める。自分たちの子どもがきちんと世話をしてもらえただろうと知っているからだ。こういうわけで、非常に多くの専制君主たちは、さえない外見をしていても、美しい女性をたやすく引きつけることができるのである。(Vugt and Ahuja 129)

男性は多くの女性と関係したい。女性は高い地位の男性と関係したい。この両者の本能的なニーズがひとりの専制君主による多くの女性の独占を生み出すのである。出エジプトの際のファラオに比定されることもある(Coogan and Chapman 102)ラムセス二世の場合も、ヴァン・ヴェットが述べているようなハーレム、それも巨大なハーレムを形成していたという。旧約聖書学者のハミルトンも、先述のスターンバークも、アメリカの考古学者でエジプト学者のジェイムズ・ヘンリー・プレステッドの以下の記述を引いている。

彼は巨大なハレムを持ち、年とともにその子どもは急速に増えていった。彼には百人以上の息子たちと、少なくともその半分の娘たちがおり、その何人かと婚姻関係を持った。このように彼の家族は非常に多かったので、ラムセス階級と呼ばれる貴族階級を構成したほどである(461)。

問題は、このようなひとりの権力者による複数の女性の独占—これ自体、平等を重視するサバンの本能に反するものであるが—が、両性の合意に基づくものではなく、権力者によって強制されるケースであり、そうした場合はこの、できるだけ多くの女性と関係したいという男性側の性戦略が性的搾取の温床となりうる。ヴァン・ヴェットはダオメー(現在のベナン)で、「既婚者であれ未婚者であれ、いかなる女性であっても連れ去って王のハーレムに入れられる可能性があった」(129-30)という例を挙げている。旧約聖書にも、ダビデ王が美しい人妻ベトシェバを自分のものにするためにその配偶者ウリヤを間接的に殺すというエピソードがある(サムエル記下 11:2-17)が、これもまた権力者ダビデ王による性的搾取の例である。指導者と構成員が対等な狩猟採集時代ではこうしたことは生じなかったであろうが、富と権力が為政者に集中し、強大な軍隊を圧政者が持つようになった農耕定住時代以降では、構成員は王による性的搾取を止めるすべを持たなかったのである。出エジプト記のこの場面でファラオ(サラを側室にしたファラオとは別)がイスラエル人の「男の子だけ」を殺すように命じているのも同様の説明ができるだろう。つまり、女の子はエジプト人の子孫を残すために利用できる、というわけ

である。事実、戦争の際にはこの場面と同じように負けた側の男性構成員のみが殺され女性は勝った側に吸収される、といった事例は歴史上ままたまあることであるらしい（Zeng et al.）。女性をみな殺してしまうのは、勝った側の子孫を残す可能性を大きく低下させることだから、行われぬのだ。ファラオはイスラエル民族の女性を自らの（ないしエジプト人の）生殖のための資源として利用しようとする一すなわち性的搾取を行うのである。

性的搾取も支配者の圧政のひとつのあらわれであるから、平等を好む人類の（より大きく言えば霊長類の）本能に働きかけ、極めて強い原始の嫌悪感を抱かせるけれども、それに加えて嬰兒殺しというこの行為はさらにそれに輪をかけて深い嫌悪感、反感を催させるもので、この描写をもってファラオの悪役のイメージは決定的なものとなる。ここで新たに加わる嫌悪感や反感の原因は、人類が本能的に有している、赤ちゃんを保護したいという感情である。

行動学者コンラッド・ロレンツは大きな頭、大きな目、広く突き出した額、まるぼちゃの頬、小さな鼻と口、短くまるまるした手足、ふっくらした体型をベビー・シェーマ（Kindchenschema）と定義した。これは「かわいい」と知覚され、それゆえ見る人に保護するような行動を促す（1, 2）。子どもが〔大人の〕保護を受けて育つ種においては、そのようなバイアスは進化のうえで適応的であり、子どもが生き残る確率を上げる（3-5）。ベビー・シェーマの行動学的効果は実験で裏付けられており（6-14）、幼児の保護者にとって示唆的である（15, 16）。（中略）わたしたちは幼児に対してのみならず、ベビー・シェーマの特徴を持つ大人（18）、動物（12, 19）、物体に対してすら（20）肯定的に反応するのである。（Glocker et al. 9115）

人間の赤ちゃんは自分ではほとんど何もできない無力かつ無防備な状態で生まれてくるために、周囲の人間とりわけ母親の献身的なケアを必要とする。したがって人間は赤ちゃんのもつ特質すなわち大きな目、額、まるい頬、小さく丸々とした体などの特徴を見ると「かわいい」「守りたい」と思うように進化してきたというわけだ。このように、「守りたい」と誰もが本能的に思う存在を殺すわけであるから、この場面は読者にきわめて不快な感情を引き起こし、それを命じるファラオは極悪人として強い反感、嫌悪感をもたらす。出エジプトのストーリーが時代や国を越えてマスターナラティブとして機能しているからには、主人公モーゼの敵対者であるファラオは、読者ひとりひとりに立ちのぼるさまざまな障害、敵を投影する（投影できる）存在であるはずだから、あらゆる悪を包含するような巨悪でなければならない。出エジプト記の語り手は圧政と嬰兒殺しを通して、冒頭からファラオを悪役として、読者の本能的反感を引き起こすように導入しているのである。

4

助産婦たちは圧政者の非人道的な命令にどう答えるべきだろうか。本能的な嫌悪感、反感をかきたてる悪役たる圧政者に対する対応の仕方には文化的な要素が含まれるが、出エジプトのストーリーの場合、この文化的な要素もまた、時代と地域を越えたマスターナラティブとして機能する一助となった。進化心理学の視点からすれば、文化は遺伝子の変異を伴わない適応である。

有機的な進化は嘆かわしいほどにゆっくりとしたプロセスであって、局所的な環境に厳密に最適な適応を生み出すことはなかなかない。とりわけ、長い時間をかけた適応のプロセスが最適解をもたらす以前に環境条件が再び変化してしまう場合にはそうである。これは多くの種にとって、局所的な環境条件と行動上の適応がどれほど厳密に合致しているかという点において限界が生じることを意味する。しかし文化的な適応はもっとずっと速く生じる。文化的な「変異」すなわち新しい行動様式や技術革新は通常、特定の必要性を満たしたり、特定の問題を解決したりするためにもたらされるものだからである。

大型類人猿はそのような変化をもたらすことができるため、文化を有すると言うことができる。しかし、彼らの文化はもっとも素朴な人間集団の持つ文化と比べたときでさえ、根本的な相違がある。われわれの祖先は累積的な文化的進化という新しいプロセスを確立することができた。技術革新は洗練され修正され、別の概念と組み合わせられた。そして大型類人猿とは対照的に、人類は他者にこうした進歩を積極的に伝えることができた。つまり、直接的に他者に教えることができたのである。これは決定的な相違であった。我々は文化を継続的に改善し拡大していくという他に類を見ない能力を持っているのである。(Schaik and Michel 18-19)

シャイクとミシエルのこの主張は、文化を進化論的に捉えるものである。遺伝子の突然変異のように、文化にも「新しい行動様式や技術革新」という形で「変異」が起こる。それが生存や繁殖に有利であれば、換言すれば適応的であれば、その「変異」すなわち「新しい行動様式や技術革新」をとる者が子孫を残し、とらない者は子孫を残せなくなるから、自然選択によって「新しい行動様式や技術革新」が優勢となる。そして人類の場合は「直接的に他者に教えることができた」ために—シャイクとミシエルはここでははっきりと記していないが、その理由はもちろん人類は言語を話すからである—他の「大型類人猿」が単に模倣によってしか習得できない「新しい行動様式や技術革新」が、教育という手段によって急速に集団内に広まるのが可能になったのである。かくして人類は遺伝子を変えることなく、環境により高度に適応することができるようになった、というわけだ。出エジプトのストーリーの場合、こうした文化的要素、古代イスラエルが置かれた「環境」にふさわしい「行動様式」のひとつは助産婦たちの、

ファラオに反抗しつつも自分たちが罰されるのは防ぐという巧妙な対応に見ることができる。

しかし助産婦たちは神をおそれ、エジプトの王が彼らに命じたようにはせず、男の子を生かしておいた。エジプトの王は助産婦たちを召して言った、「あなたがたはなぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか」。助産婦たちはパロに言った、「ヘブルの女はエジプトの女とは違い、彼女たちは健やかで助産婦が行く前に産んでしまいます」。それで神は助産婦たちに恵みをほどこされた。そして民はふえ、非常に強くなった。助産婦たちは神をおそれたので、神は彼女たちの家を栄えさせられた。そこでパロはそのすべての民に命じて言った、「ヘブルびとに男の子が生まれたならば、みなナイル川に投げこめ。しかし女の子はみな生かしておけ」。(1:17-22)

助産婦たちの「彼女たちは健やかで助産婦が行く前に産んでしまいます」という発言は、明らかに虚偽である。「助産婦たちは神をおそれ（中略）男の子を生かしておいた」からわかるように、彼女らは意図的に王の命令に従わなかったのだ。この嘘はしかし、巧妙である—ファラオは「助産をするとき」に殺せ、と命じたのであるから、助産婦が行く前に産んだのであれば、そもそも助産はしていないのであるから命令に従う必要はない。シェイクスピアの『ヴェニス商人』の裁判の場面におけるポーシャの機転(4.1.318-325)を思わせるような、法（命令）の網をくぐった対処法である。このような助産婦たちの行動には「トリックスター」と呼ばれる特徴がある、とカーは指摘する。カーによれば、トリックスターとは「謀略や違法行為によって生き延びる能力が宗教、文学、ないし他の文化的側面において称賛されるようなキャラクター」のことであり、「弱者の文化」に特徴的である(38)。カーはさらに、このようなトリックスターが魅力的なのは「弱い立場に置かれた人々」であるという。

こうしたトリックスターの伝統は説教や日曜学校の講義でとりわけ焦点の当たるものではない。支配的な文化に属する多くの人々は、道を切り開くために策を弄し、嘘をつきさえる、この種の文化的英雄を称えることに慣れていないのだ。しかし、そのようなストーリーは、自らの社会的文脈で「ルール通りに」プレイしていたのでは必然的に打倒されてしまうと感じる人々を力づけるようなものであった。ネイティブアメリカンであろうと古代イスラエル人であろうと、弱い立場に置かれた人々は不可能とも言える逆境を知恵を働かせて克服することで道を切り開いてきた祖先を称えることで勇気を得るのである。支配者層にとっては、そうしたトリックスター的なストーリーは、それ以外の部分では秩序だった聖書において当惑させるような要素であろう。しかし底辺の人々にとって、そうしたストーリーは希望を持ち支配に抵抗する主要な手段でありうるのである。(47)

トリックスターという文化的要素が、出エジプトのストーリーを「反逆のマスターナラティブ」

たらしめるのに一役買っていることは、このカーの指摘からはほぼ自明であろう。カーは「弱い立場に置かれた人々」にとってトリックスターが魅力的だというのが、農耕開始以降、富と権力の集中によってリーダーは強者に、部下は弱者になったわけだから、圧政者に虐げられるのは基本的に弱者である。彼らは「『ルール通りに』プレイしていたのでは必然的に打倒されてしまう」一狩猟採集時代の圧政者を制御した二大「ルール」である、同盟しての反逆と集団的な逃亡はもはや容易には機能しないから、「知恵を働かせて」「道を切り開く」ことが必要なのだ。トリックスター的な主人公はしたがって、圧政者に抑圧された、弱い立場にある読者たちが自らを投影し、共感し、さらに、生き方の模範としうるような存在となっているのである。

トリックスター的な戦略は効果的ではあるが、個人的な不服従であるにとどまり、ファラオの打倒には至らない。強大な圧政者への反逆を成功させ、問題を根本的に解決するために出エジプト記のストーリーテラーが提示する解決策は、圧政者よりも強い存在が助けてくれる、というものだ。圧政者より強い存在とは神であり、この神は善行に報い悪事を罰するために、抑圧された弱い立場の人々は善行をし悪事を避けることで神を味方につけ、富と権力をかさに悪行の限りを尽くす暴君は神の罰を受けて滅ぶのである。

人間世界に能動的に介入する神を信仰することは適応的に働き、出エジプトのストーリーを反逆のマスターナラティブたらしめる中核的な役割を果たしている。進化心理学の視点からすると、「神」の信仰は大きくふたつの意味を持つ。ひとつは、超自然的な存在からの罰を恐れることによって集団内の協力を可能にし、もうひとつは超自然的な存在の肯定的な介入を信じることで、抑圧による否定的な心理的影響を軽減することだ。モーゼの脱出のストーリーを通して、善行に報い悪事を罰する神を信ずる価値観を共有した集団は結束が高まり、競争力が増すから、圧政者（と彼らが目する人物）に対する大規模な反逆も成功しやすくなるというわけだ。

助産婦たちの不服従の場面では、ストーリーテラーは神の「罰する存在」としての側面をまず前面に打ち出し、読者に強い印象を与え、その結果協力的行為は大幅に改善されることになる。「助産婦たちは神をおそれ、エジプトの王が彼らに命じたようにはせず、男の子を生かしておいた。」という一節の「神をおそれ」とは、「神の『罰を』おそれ」という意味であると考えてよからう。助産婦たちは本能的に、嬰兒殺しは悪であると考え、ファラオの命にしたがって悪事をなせば、必ずや自らに神罰が下ることを恐れたのである。ここでは、どのように隠してもすべてを見通し、そして悪事を察知したら必ず罰せずにはおかない神の存在が前提となっている。この神は、「助産婦たちに恵みをほどこされ」「彼女たちの家を栄えさせられ」という、報酬を与える神でもあるが、助産婦たちの行動の動機が報酬の獲得ではなく罰の忌避である。「神を『おそれ』」という表現にそれがうかがえる。彼女たちは御利益が欲しくて逆らったのではない。罰が怖かったのだ。こうした罰の存在は、集団の構成員がお互いに協力し合う場合にきわめて有効に働くという。生物学と政治学のふたつの博士号を持ち、進化政治学という新た

な領域に挑んでいるオックスフォード大学教授のドミニク・ジョンソンは、罰の効用について以下のように述べている。

誰かに何かをして欲しいとすれば、ふたつの基本的な道具がある。鉛と鞭だ。本書は鞭—罰—に、協力の源として焦点を当てる。これは鞭の方が望ましいからではなく、〔実験の結果〕より効果的であることがわかったから、という単純な理由による。〔中略〕経済学、政治学、そして進化生物学の広範な研究は共通の結論に達している。罰の抑止効果によって、協力はずっと安定的に（時として、抑止効果によってのみ）実現しうるのだ。（15-16）

ジョンソンはそのうえで、「今日のわれわれが、法律、警察、裁判所、刑務所のおかげで協力できるのだとすれば、そのような制度の力が弱かった、あるいは完全に不在であった時代、人類はどのようにして協力してきたのであろうか」（37）と問いかけ、以下のように述べる。

罰するという重荷が集団「外」の何者か、どんな人間の処罰者よりもずっと強力な何者かに委託できるとしたらどうだろうか。たとえば、神に。単なる人間による、限定され、信頼できない処罰ではなく、超自然的な罰—天罰—を恐れることは、進化論上の謎を解き明かす鍵になるかもしれない。（38）

そして、ジョンソンは、超自然的な存在による罰は「侵犯が自動的に検知され」「自動的に処罰され」「二次的なフリーライダー（皆のために貢献するが、貢献しなかった者に罰を与えない人間）というとりわけ厄介な問題を解決し」—「神が処罰を行えば、他の人間は処罰する必要がないから」—「処罰を行う者への報復がありえず、復讐の連鎖や社会の混乱が生じない」上に「超自然的な罰という恐るべきリスクは、そもそもフリーライディングを行う者が少なくなることを意味し、協力のベースラインを高め、人間が現実世界で行わなければならない監視や処罰といった負担を軽減する」ために、「世俗的な〔神概念を伴わない〕罰よりもすぐれている」という（71-72）。ジョンソンによれば、「超自然的な罰は世界中のあらゆる文化、あらゆる時代に共通の」（57）概念であって、「生存と繁殖を促進したためにダーウィンの自然選択によって選択された」「進化論的適応」（8）であるという。ただし、ジョンソンはこれが人間の本能であるというのだが、近年の狩猟採集民族を対象にした網羅的な研究によれば、もっとも古い宗教の形はアニミズム的な精霊崇拜であり、人間社会に能動的に介入するような神概念は比較的最近のものであるされている（Peoples et al. 277）。筆者はジョンソンのいう超自然的な罰が持つ絶大な威力についてはその通りであろうが、そうした概念はある程度までは本能的な気質に根づいているかもしれないが、むしろ文化的な適応であって、それゆえにストーリーを通じて共有、強化される必要があったのだと考えている。シャイクとミシェルも筆者に同意してくれるだろう。シャイクとミシェルは、ジョンソンのいう「超自然刑罰仮説」（supernatural

punishment hypothesis) には完全に同意しておらず、そうした刑罰をもたらす超自然的な存在への信仰を含む制度的宗教は文化的適応であると考えているようである (78)。その点では、出エジプトのストーリーテラーが神を導入する際、まず罰する者としての側面を提示するのは示唆的だ。圧政者への反感、嬰兒殺しへの嫌悪感という本能を刺激し、権力者に反抗しようとする助産婦たちへの共感を喚起した上で、文化的適応としての、罰を与える超自然的な存在への信仰を自然な形で読者に伝えようとするのである。その結果読者がこの価値観を持つようになれば、ジョンソンが言うように、集団内の協力的行為は劇的に改善される (73) ことになるのだ。

超自然的な存在に助力を求める、あるいは超自然的な存在の怒りをしずめることは「困った時の神頼み」などと、否定的に語られることも多いけれども、苦境にあっても解放の可能性があると信じることは適応的に働くことが実験で確かめられている。心理学者のロイ・F・バウマイスターとウィリアム・フォン・ヒッペルは以下のように述べている。

現実の代替一起こっていないこと—が持つ重要性は心理学の研究の中に豊富に記録されている。たとえば、脱出の選択肢を得ることで物理的ストレス因子の否定的影響が大きく軽減されることは、グラス、シンガー、フリードマン (1969) による今や古典となった「パニックボタン効果」の実験で示されている。この研究では、被験者がランダムに流されるノイズを聞きながらさまざまな課題に取り組む。グラスらはノイズを流したことによって作業効率がどの程度下がったのかを測定した。しかし、必要に応じてボタンを押せばノイズは止まるのだとあらかじめ告げられていたグループは—誰もボタンを押さなかったにもかかわらず—作業効率は低下しなかった。代替の、未だ実現していない現実を信じることで、ノイズというストレスの有害な影響を軽減することができたのである。(12)

ここで重要なのは、「パニックボタン」によって否定的な影響が軽減されるということに加えて、実際にパニックボタンが押されていないという事実である。つまり、本当はノイズを止める効果などない、見かけだけのダミーのボタンであっても被験者たちのストレスは軽減されるわけだ。バウマイスターとヒッペルが「未だ実現していない現実を『信じる』こと」と述べているのはそのためである。重要なのはパニックボタンが実際に起動するかどうかではなく、起動すると「信じる」ことなのである。超自然的な存在が自らを助けてくれる、ないし、超自然的な存在が自らに対して害を与えるのをやめてくれる、と「信じる」ことで、否定的な影響は同様に軽減しようと考えられる。そう考えてみれば、超自然的な存在への信仰とは人類にとって一種のパニックボタンとして働くのである。信仰の対象である神が実在するとしないとにかかわらず、つらい現実からの解放があると信じるだけで適応的に作用するのだ。

5

「どのような仕事でも、その始めこそが最も重要なのだ」（154）。プラトンの『国家』に見える言葉である。これは教育について登場人物たちが議論しているときのせりふだが、ストーリーテリングにおいても同じことが言えるだろう。「関心がなければ芸術は死んでしまう」（ボイド『ストーリーの起源』96）から、いかなるすばらしいストーリーといえども、鑑賞者の関心を引くことができなければ、宝の持ち腐れだ。冒頭部分というのは、だから、非常に重要である一作品世界に無理なく入ってもらうことができなければ、読者はすぐにほかのことに関心を向け、苦心の作も全く読まれずに終わってしまうだろう。

出エジプトのストーリーの場合、記者たちは自らが意図する目的を果たすべく、人類がサバンナの狩猟採集生活で進化させてきた本能に訴えかけることで、読者の関心を引く序章を作り上げた。バビロン捕囚の際、さまざまな伝承やテキストを集めて現在の「出エジプト記」を作り上げた記者たちは、モーゼ律法を広く読者に伝えるために（Schaik and Michel 129）、あるいは異国の地で強制労働している同胞たちに希望を持たせるために（Carr *Holy Resilience* 110-11）、先祖伝来伝わるモーゼの脱出のストーリーに読者の関心を集める必要があった。彼らには進化心理学という概念もなくサバンナ原則についての知識もなかったけれども、無意識のうちに読者を引きつける方法がわかっていたのであろう。ヒトがチンパンジーやゴリラから分かれる以前から持っていた、頭脳の奥深くに刻み込まれた平等主義と圧政に対する反逆の本能（Boehm 95）—記者たちは冒頭部分で、この人類のサバンナの本能に訴えかけるような、非人道的な労働力、性的搾取を行う絵に描いたような圧政者ファラオと、それによる子孫繁栄という生物の究極の目的、そこからもたらされる本能的な強い幸福感の消滅の危機を対置させ、読者の関心を釘付けにすることに成功したのである。

圧政者への反感を惹起することでストーリーを始めたことは読者の関心を引く上できわめて効果的であった。進化論批評ではストーリーの鑑賞は一種のシミュレーション、疑似体験であると捉えるが、疑似体験の悲しさは、自らが行動して世界を変えることができないという点にあり、そのため読者は先を読み進む以外に自らの本能的な怒りをおさめ、つかの間の幸福感を取り戻す方法はないのである。ストアは以下のように述べている。

登場人物が利己的に振る舞うと（中略）わたしたちは彼らが〔悪行の〕報いを受けるところを見たいという強い衝動に駆られる。しかし銀幕の中に飛び込んでいって直接悪人の喉をしめあげるわけにはいかないから、行動したいという原初的な衝動によってわたしたちは、この部族的な願望が満たされるときまで、ページをめくりつづけ、映画を見続けることになる。（139）

まさしくこれが、出エジプト記の記者たちが狙ったことであった。奴隷からはいあがったヨセ

フに共感し、その子孫が増えたことに感動した読者は、それを脅かそうとする圧政者ファラオに強い怒りを覚え、彼が「報いを受けるところを見たい」と思うのだが、疑似体験である以上、その「願望が満たされる」には「ページをめくりつづけ」るしかないのだ。こうして読者はエジプト脱出というストーリーの世界に没入していくのである。

「ページをめくりつづけ」る中で、読者は知らず知らずのうちに、ストーリーが標榜する価値観を身につけていく。今回分析した冒頭部分だけでも、トリックスター的行動という弱者の行動の指針となるような処世術があり、また、神をおそれ、その介入を期待するという、協力行為を強化し、苦境を乗り越える希望を与えてくれるような考え方があった。この善行に報い悪事を罰する神は、実は後にモーゼ律法の中核として登場する (Johnson 68-71) わけだが、既に冒頭にそれがミニチュアのように織り込まれている。読者はお説教を聞くときのように、そうした価値観を正面から理性的に学ぼうとするのではなく、ストーリーの展開を手汗を握って追いかけていって、自然に吸収していくのだ。このようにして、出エジプト記を今日残っている形に仕上げた記者たちは、圧政者への反逆というストーリーに載せて、神の介入による圧政からの解放という希望、あるいは、モーゼ律法という、シャイクとミシェルの言葉を借りれば「文化のビッグ・バン」(28) をもたらした文化の大発明を読者に共有させようとしているのである。

これまで見てきたように、モーゼによる出エジプトのストーリーは、モーゼが登場する以前の段階で、既に読者の関心を捉えて放さない舞台設定がなされ、ストーリー全体にかかわる重要な価値観が提示されているのだが、それらがすべて、どの読者にとっても他人事でないものであることに注目したい。圧政は農耕定住以後の普遍的な問題であった (Vugt and Ahuja 124) し、それに対する対処法としての大規模な協力に不可欠な超自然的な存在への信仰も、ほとんどどの時代、どの地域にもみられる現象 (Johnson 57) であった。人類であれば誰でも遭遇する問題を扱い、それに対してほとんど常に適用可能で効果的な対処法が示されていること、しかも、読者の本能に訴えかけるような効果的な語りがなされていること、これが「反逆」のマスターナラティブの導入として大きな役割を果たしているように思われる。プラトンの言葉を借りれば、これで「最も重要」な部分は済んだ。読者が「ページをめく」と、いよいよファラオに鉄槌を下し、苦しむイスラエル民族を解放する英雄モーゼの誕生の場面となる。その部分の分析はまた次の機会としたい。

引用文献

Baumeister, and von Hippel. "Meaning and Evolution: Why Nature Selected Human Minds to Use Meaning." *Evolutionary Studies in Imaginative Culture*, vol. 4, no. 1, 2020, pp. 1-18. doi:10.26613/esic.4.1.158.

Boehm, Christopher. *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*. Basic Books, 2012.

- Boyd, Brian. "The Evolution of Stories: from Mimesis to Language, from Fact to Fiction." *Wiley Interdisciplinary Reviews: Cognitive Science*, vol. 9, no. 1, 2017, doi:10.1002/wcs.1444.
- Breasted, James Henry. *A History of Egypt: From the Earliest Times to the Persian Conquest*. Cambridge UP, 2016.
- Buss, David M., and David P. Schmitt. "Sexual Strategies Theory: An Evolutionary Perspective on Human Mating." *Psychological Review*, vol. 100, no. 2, 1993, pp. 204–32. doi:10.1037/0033-295x.100.2.204.
- Carr, David. *An Introduction to the Old Testament: Sacred Texts and Imperial Contexts of the Hebrew Bible*. Wiley-Blackwell, 2010.
- . *Holy Resilience: The Bible's Traumatic Origins*. Yale UP, 2014.
- Carroll, Joseph. "Evolutionary Literary Theory." *A Companion to Literary Theory (Blackwell Companions to Literature and Culture)*, edited by David Richter, Wiley-Blackwell, 2018, pp. 425–38.
- Clasen, Mathias F. *Why Horror Seduces*. Oxford UP, 2017.
- Coffey, John. *Exodus and Liberation: Deliverance Politics from John Calvin to Martin Luther King Jr.* Oxford UP, 2013.
- Coogan, Michael, and Cynthia Chapman. *The Old Testament: A Historical and Literary Introduction to the Hebrew Scriptures*. 4th ed., Oxford UP, 2017.
- Glocker, M. L., et al. "Baby Schema Modulates the Brain Reward System in Nulliparous Women." *Proceedings of the National Academy of Sciences*, vol. 106, no. 22, 2009, pp. 9115–19. doi:10.1073/pnas.0811620106.
- Gottschall, Jonathan. *The Storytelling Animal: How Stories Make Us Human*. Houghton Mifflin, 2013.
- Friedman, Richard Elliott. *Commentary on the Torah*. HarperOne, 2003.
- Hamilton, Victor. *Exodus: An Exegetical Commentary*. Baker Academic, 2011.
- Johnson, Dominic. *God Is Watching You: How the Fear of God Makes Us Human*. Oxford UP, 2015.
- Kanazawa, Satoshi, and Norman P. Li. "The Savanna Theory of Happiness." *The Oxford Handbook of Evolution, Biology, and Society (Oxford Handbooks)*, edited by Rosemary Hopcroft, Oxford UP, 2018, pp. 171–94.
- Kenrick, Douglas T., et al. "Renovating the Pyramid of Needs." *Perspectives on Psychological Science*, vol. 5, no. 3, 2010, pp. 292–314. doi:10.1177/1745691610369469.
- McAdams, Dan P. *The Art and Science of Personality Development*. The Guilford Press, 2016.

- . *The Redemptive Self: Stories Americans Live By*. Oxford UP, 2013.
- Meyers, Carol. *Exodus (New Cambridge Bible Commentary)*. Cambridge UP, 2005.
- Niehaus, Jeffrey. *Ancient Near Eastern Themes in Biblical Theology*. Kregel Academic, 2008.
- Peoples, Hervey C., et al. "Hunter-Gatherers and the Origins of Religion." *Human Nature*, vol. 27, no. 3, 2016, pp. 261-82. doi:10.1007/s12110-016-9260-0.
- Schaik, van Carel, and Kai Michel. *The Good Book of Human Nature: An Evolutionary Reading of the Bible*. Basic Books, 2016.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. The Arden Shakespeare, 2011.
- Sternberg, Meir. *Hebrews between Cultures: Group Portraits and National Literature (Indiana Studies in Biblical Literature)*. Indiana UP, 1999.
- Storr, Will. *The Science of Storytelling: Why Stories Make Us Human and How to Tell Them Better*. William Collins, 2019.
- Tamariz, Monica. "Linguistic Evolution." Encyclopedia of Evolutionary Psychological Science | SpringerLink, edited by Todd K. Shackelford and Viviana Weekes-Shackelford, Springer International Publishing, 2016, doi.org/10.1007/978-3-319-16999-6_3350-1.
- Thayer, Bradley. *Darwin and International Relations: On the Evolutionary Origins of War and Ethnic Conflict*. The UP of Kentucky, 2004.
- Vugt, Mark van, and Anjana Ahuja. *Selected: Why Some People Lead, Why Others Follow, and Why It Matters*. Profile Books, 2010.
- Zeng, Tian Chen, et al. "Cultural Hitchhiking and Competition between Patrilineal Kin Groups Explain the Post-Neolithic Y-Chromosome Bottleneck." *Nature Communications*, vol. 9, no. 1, 2018, doi:10.1038/s41467-018-04375-6.
- 宇野哲人『論語新釈』講談社, 1980.
- 『聖書：口語訳』日本聖書協会, 2015.
- ブライアン・ボイド『ストーリーの起源』小沢茂訳, 国文社, 2018.
- プラトン『国家 (上)』藤沢令夫訳, 岩波書店, 1979.